

自発性と複数性

—アーレントにおける「自発性」概念をめぐる試論（下）

麻生博之

- 一 はじめに
- 二 政治的自由と自発性の自由
- 三 予測・予見の不可能性
- 四 出生性と唯一性
- 五 複数性という前提〔以下、本号〕
- 六 呼応としての自発性
- 七 結びにかえて

五 複数性という前提

（一）自由と複数性

前節で少し立ち入って確認したとおり、アーレントが自由の源泉とみなす自発性は、出生性に根ざすものとみなされていた。すなわち、自発性の自由、予見されえない新たなものを始める自由は、誰もが誕生したものであることにもとづく各人の唯一的な個性のもとにこそ、その根拠が見いだされるものであった。しかしその一方で、アーレントの思考にあたってはまた、（第二節で

も確認したように）すぐれた意味での自由はあくまで政治的なものとして、つまり政治的自由として把握されるべきものであり、複数の人びとの間の関係、複数性においてのみ可能となる相互的・共同的な行為のあり方を意味するはずのものであった。「自由は複数性においてのみ存在しうる」（DT. 223: I-287）、あるいは「自由は政治に固有の間の領域（Zwischen-Bereich）においてのみ存在する」（WP. 12: 6）のである。

まさにこのかぎり、自由をめぐるアーレントの思考には、いわば深刻な不整合さが伴われているように思われる。つまり、アーレントの視点にとつていずれも自由の核心をなすはずのそれら二つの自由、自発性の自由と政治的自由は、とりわけ複数性との関連におけるその成り立ちにかんして、決定的に相容れず、対立させているとも考えられるのである。というのも、「政治的自由は、人間の複数性の領域においてのみ可能である」（EM. 2-200: I-239）のに対し、自発性の自由は、唯一的な個性にこそもとづくものである以上、そのものとしては、（第二節で見たアーレントの言葉にそくしていえば）孤立した個人においても成り立

ちうる「前政治的なもの」であり、そもそも複数性を不可欠の条件とはしていないことになるはずだからである。政治的自由とは相容れないそうした自発性の自由のあり方は、たとえば「イニシアティヴ」(Initiative: Initiative)ということがらをめぐる「人間の条件」独語版(『活動的生』)の次の一節にも明確に示されているように思われる。アーレントにあって「イニシアティヴ」とはおおむね、新しい何かを「始めること」を意味し、それゆえ自発性とはほぼ重なるものといえる。そのイニシアティヴの「動因」(Antrieb)をめぐり、そこではこう述べられている。

語り、行為しつつ、私たちは人びとの世界へ、つまり私たちがそのうちに生まれる前から現存していた人びとの世界へと参入する。「……」いかなる者もこの最小限のイニシアティヴを欠くことはできないが、そうしたイニシアティヴはしかし、労働のように何らかの必然性によって強いられるのではないし、また成果という動因や有用さの見込みによつていわば誘い出されるものでもない。私たちが仲間に加わろうとする他者たちの現前は、個々の場合にはいずれも刺激として働くかもしれないが、しかしイニシアティヴそのものは、そうした他者たちの現前によつて条件づけられてはいない。その動因はむしろ、始まりそのものうちに、つまりこの世界に私たちが誕生したことによつて生じた始まりのうちに存しているように思われる。私たちは、自分のイニシアティヴにもとづいて新しい何かをみずから始めることにより、その始まり

に照応するのである。(VA 215: 219)

既存の共同世界、先立って存在する人びとの世界へと、行為において参入すること——たとえば他者に呼びかけ語りかけること——は、たとえほんのわずかであれ、何がしかの新たなことを既存の世界にもたらすことを意味する。おそらく誰にとつても不可避免的なそうしたイニシアティヴ、新たな何かを始めるということは、ただし「私たちが仲間に加わろうとする他者たちの現前」(die Anwesenheit von Anderen)を動因とするものではない。他者たちが現に存在していることは、たしかにそのようなイニシアティヴにとつて、「個々の場合にはいずれも刺激として働く」(als ein Stimulus wirken)かもしれない。しかし「イニシアティヴそのもの」は、他者たちの現前——政治的自由はそれによつて、たくく依拠している (cf. WP. 98: 83, ibid. 50: 40) ——によつて、「条件づけられてはゐない」(nicht bedingt sein)。イニシアティヴの動因はむしろ、「この世界に私たちが誕生したことによつて生じた始まり」のうちに、つまりは出生性のうちにこそ存しているといわれなければならない。

こうしてアーレントの視点をあらためてふまえてみても、自発性の自由と政治的自由との間に埋めたい隔たりが存していることは、やはり明らかであるように思われる。自発性の自由はそのものとしては、他者との関わりを条件としておらず、複数性とは無関係なものとして把握されていることになるはずだからである。しかしながら、こうした捉え方は、じつはなお性急なものといわ

れなければならぬように思われる。つまり、アーレントの思考の実質を十分に捉えたものになっていないと考えられるのである。というのも、すでに簡単に予示したとおり、アーレントの思考も慎重に検討してみるなら、むしろ自発性の自由そのものにとつても複数性がある種の不可欠の前提をなし、自発性ということが自ら自体が他者との関わりにおいてはじめて可能になるものとして（少なくとも潜在的には）捉えられているとみなしうるためである。

とはいえ、これまで見てきたところでは、アーレントのテクストをどのように読めばそうした理解が可能になるのかは、いうまでもなく不分明である。そしてまた、自発性はそもそもどのような意味で複数性と関連し、その内実がいかなるものとなりうるのか、そのことも示されていない。以下ではまず、自発性の自由にとつても、じつは複数性がいわば不可欠の前提となっていることを、いくつかの点にそくして確認してみることに始めたい。⁽³⁾

(2) 複数性と「ひとり」であること

アーレントの視点にとつて、自発性の自由を担保する根拠は、まずは何よりも出生性のもとに、そしてそれゆえ唯一的な個性のもとに見いだされていた。そのことはしかし、自発性が複数性と無関係なもの、あるいは対立するものとして捉えられていることを意味しない。アーレントの思考のもとではむしろ、(テクストにおいて直接明示されているとは必ずしもいえないとしても) 自発性の自由、つまり新たな何かを始めうるという自由は——政

治的自由とは少し異なる意味において——やはり複数性を前提とし、他者たちの間でこそ可能になるものとして想定されていると考えることができる。

そのことは、さしあたってはまず、人間の「生」そのものを複数性と不可分のものとみなすアーレントの視点にそくして確認することもできよう。たとえば『人間の条件』独語版の冒頭部に近い箇所で、アーレントは人間の生について端的にこう述べている。

人間にとつて、生きているということは——ラテン語、すなわちおそらく私たちが知っているなかでもっとも徹底して政治的な民族の言語が示しているように——「人びとの間にあること」(inter homines esse) に等しく、死ぬということとは、「人びとの間にあるのをやめること」(desinere inter homines esse) に等しい。(VA. 17: 12)

他のテクストでもくり返し述べられるように、人間にとつて「生きていること」(Leben) は、とりもなおさず「人びとの間にあること」(inter Menschen welen) を意味する (cf. *Ibid.*: 31: 28, BPF. 73: 97, RJ. 165: 215)。あるいは、人間が生きるとは、あくまで「複数性において」そうすることにほかならない (cf. DT. 460: II-15)。そしてそうだとすれば、自発性はやはり、ともかくも複数性を前提したものとして想定されていることになる。なぜなら、アーレントの思考にあつて自発性は、すでに確認したとおり「人間の条件」の一部をなし、それゆえまた、人間の

「生」そのものとただちに「結びついている」ものと把握されているためである (EU. 677: III-231f)。予見されない新たなことを始めうる人間の生は、まさに人びとの間にあるということにおいてこそ成り立つ——まずはこのように考えられているとみなしうるはずである。

そして自発性の自由と複数性との関連にかかわるこのようなアーレントの視点は、さらにいくつかの別の理路にそくしても見定めることができる。とりわけ重要であると思われるのは、複数性から切断されたあり方——「反政治的」なあり方——においては自発性もまた消失するとみなすアーレントの思考である。その仔細については、ただし順を追って確認する必要がある。まずは、いわば「ひとり」(alone: allein)であることをめぐるアーレント独特の視点を整理することで、複数性から切断されたあり方をめぐるその思考の要点をおさえておくことにしたい。

孤独や孤立といった「ひとり」であるあり方について、アーレントは（その読者にはこの点も周知のとおり）、随所で立ち入った考察を行っており、おもに三つのあり方を明確に区別している。すなわち、「孤独」(solitude: Einsamkeit)、「孤立」(isolation: Isoliertheit)、「孤絶」もしくは「見捨てられたあり方」(loneliness: Verlassenheit)⁽⁴⁾である。

まず「孤独」とは、端的にいえば、ひとりで自分自身と向きあっているあり方のことである。いわば「私と私自身との交わり」(BPF. 157: 214)としかたかたで、あるいは「私と私自身との対話」として「思考」をめぐらすようなあり方がその典型とな

る (OT. 625f: III-321, cf. EU. 728: III-298)。次に、「孤立」とはとりわけ、ひとりで何ごとかにうち込んでいるあり方⁽⁵⁾、つまり他者との関わりから離れて「自分の仕事に没頭する」(VA. 265: 273)ような活動のあり方を指す。そのひとつの典型となるのは、「第二節で言及した」「制作」にとりくむ者、たとえば芸術作品の創作に傾注する者のあり方である (cf. OT. 623f: 319, BPF. 255: 354f)。

孤独と孤立というこれら二つのあり方は、たしかにさしあたっては、どちらもひとりであることにあたる。しかしアーレントは、それらのいずれについても、じつは複数性と対立するものではなく、むしろ複数性のあり方のひとつであると考ええる (cf. DT. 461f: II-15f)。なぜなら、まず孤独とは、いわば私が「私自身と共に」(together with my self) あること、それゆえ——アーレントがしばしば用いる言い方にそくしていえば——「ひとりのうちなる二者」(two-in-one)であることを意味し (OT. 625: III-321)、だから「孤独において私は、じつはけっしてひとりではない」(EU. 728: III-298)ということができるからである⁽⁵⁾。そしてまた、孤立にかんじていえば、たとえば制作は、「事物の世界」と結びつき、たえず「接触を保つ」がゆえに (VA. 265: 273, OT. 624: III-319)、じつは「じつでも間接的に政治的 (ver-mittelt politisch) である」(DT. 374: I-473)とみなされるべきだからである。制作がかかわる事物の世界は、「人間の手になるもの (the human artifice) と」この世界」(OT. 624: III-319)であり、それゆえ「他者たちの現実存在」を明白に「証し立てて

いる」(VA. 265: 273)。そうである以上、制作は一方で、事物の世界とのかわりを介して、同時にまた人びとの間で、あるいは複数性のうちで遂行されるものであることになり、他方ではその成果としての作品、ないし生産物を、ほかならぬ複数性の世界、共同世界に対して開示し、また「つけ加える」(DT. 374: 1-473c.) ことになるのである。⁽⁶⁾ 孤立したあり方で「制作する人」は、少なくとも「間接的なしかたで」、まさに「人びとの相互共存とかく結びついている」(VA. 265: 273)。

こうした孤独と孤立のあり方のように対して、ひとりであることの三つ目のあり方、「孤絶」ないし「見捨てられたあり方」は、端的にひとりであること、つまり「本当にひとりである」(wirklich allein sein) 乃至 (EU. 729: III-299' cf. OT. 625: 321) を意味する。それは、他の人びとからも、また事物の世界からも、そして自分自身からも「見捨てられてゐる」(verlassen sein) ということであり (cf. EU. 729: III-299) 、複数性からまったく切断され、いわばそれと対立する「反政治的」(antipolitisch) なありようである (cf. VA. 270: 278. *ibid.* 273: 280. DT. 460: II-15)。そしてアーレントは、その典型となるあり方をとりわけ、活動の三分区における「労働」のもとに見いだす。「労働にあつて」ひとは、「共同世界と事物の世界から見捨てられ、自らの肉体に投げ返されて、自らの生命を保持するというむきだしの必然性に隷属している」(VA. 270: 278)。それは、他の人びととの相互的・共同的な行為に参与することなく、また制作にうち込み事物と向きあうことも、思考において自分自身と対話を重ねることなく、

ただやみくもに生存の維持と再生産へと向かうような生のあり方といえる。

「本当にひとりである」こととしてのこの見捨てられたあり方は、とはいへ、他者たちの実際的な不在を前提とするものではない。それはむしろ、たとえば「群衆 (crowd) のただなかでも私たちを圧倒することのある」ような「悪夢」(RI. 96: 117) である。たとえひしめきあう無数の人びとにとり囲まれていたとしても、そこにそれぞれ唯一の諸個人相互の関わりが、あるいは複数性が成立していないかぎり、ひとはいつそう深刻に「ひとり」であることになるからである。その意味で、「現代の大衆社会 (Massengesellschaft)」においては——現代の「大衆」とは、ばらばらに「アトム化された」個人、そして他の誰とでも「とり換えのきく」個人から成るものであるために (EU. 510ff.: III-19ff. *ibid.* 566: 88) ——、見捨てられたあり方は「大衆現象」(VA. 73: 73) 、あるいは大衆の「日常的経験」(OT. 627: III-323) となつてもいる。ただし、そのような大衆社会を基盤としながら、見捨てられたあり方が、より徹底したかたちで、いわば意図的・組織的につくりだされるのは、全体主義の支配体制においてである。独語版『全体主義の起原』の最終章では、たとえばこう述べられている。

テロルのもたらす複数性の破壊は、各々の個人のうちに、すべてのひとから完全に見捨てられていくという感情を残す。〔……〕全体主義的支配において政治的に実現される人間共

存の根本経験は、見捨てられたあり方の経験である。(EU: II-277: III-297)

「テロル」、すなわち「全体主義的支配の固有の本質」(EU: 710: III-277)をなす全面化された暴力は、「複数性の破壊」を遂行する。いかえるなら、「全体的テロルの強制」は多様な人びとの間の関係を解体し、それらの人びと相互の差異を抹消して、「多くの人間たちからひとり、ひとりの人間をつくる」こと、もしくは「人間たちを圧縮して群衆 (Masse) にする」ことをおし進める (EU: 723: III-292)。そして、そのような全体主義的暴力的支配によって実現される人間の「根本経験」こそ、「見捨てられたあり方の経験」である。複数性が破壊され、人びとが互いに交換可能なアトムの集合へと還元されるとき、各人は直接的にも間接的にも、他者たちとの関わりから切断され、「すべてのひとから完全に見捨てられている」ありようのうちに投げ込まれることになるのである。

(3) 自発性の前提としての複数性

見捨てられたあり方をめぐるこのような事態は、ところで、ここでの主題、すなわち自発性の自由ということがらとどのような関係にあるとみなしうるだろうか。そのことはおそらく、いままも注意を向けた全体主義の支配のあり方にかんするアーレントの視点をふまえるなら、ほぼ明らかであると思われる。すなわち、複数性の破壊という事態は、自発性の根絶ということがらと重なり

あい、いわばその前提ともなっている、そのように捉えることができるはずである。⁽⁸⁾

(すでに第三節のなかで確認したように、) 全体主義の支配が議論むのは、わけても自発性の自由の除去、つまり予見されえない新たな何かを始める自由を根絶することであった。なかばそのこの前提として、全体主義的支配は複数性を破壊する。すなわち、各人を他者たちとの多様な関わりから切断して、見捨てられたあり方へと追いやり、やみくもに生を継続することに向かわせるのである。たとえば——アーレントの視点にそくしてもう少し実質的なことを確認しておくとすれば——、ひとは見捨てられたあり方において、他者たちとも世界とも「接触」を失い、関わりを欠くことになるがゆえに、ある種の強迫的な「演繹的思考」へと、つまり与えられた前提に隷属していわば自動的に進行するような思考へと陥ることになるが (cf. EU: 722: III-290f, ibid. 727f: III-297f)、そのことは、ひとが自発性を奪われて、予見可能な反応を行うだけの「反応の束」へと縮減される事態に連なるものといふことができる。

こうしてアーレントの視点からすれば、複数性から切断されたあり方においては自発性もまた消失することになる。そしてそれゆえに、少し前に人間の「生」をめぐる論点にそくしてとり急ぎ見ておいたとおり、自発性の自由は、やはり複数性を前提とし、他者たちの間でこそ可能になるものとして想定されているとみなすことができる。

たしかにアーレントの思考にあつて、自発性は何よりも出生性

に、したがって唯一の個性にその根拠が見いだされるものであった。そのためまた、(第二節であらかじめ注意を向けておいたように) 自発性の自由それ自体は、「究極的には個人から生じてくる」ものとして、「前政治的」なものとみなされていた。だから、「始まりをもたらす」そのことは「ひとりて孤立して」なされるものともいわれ、自発性はたとえば「他者たちから孤立したかたちで」なされる制作の活動のうちにも見いだされていたのである。

けれども、そうした自発性の成り立ちは、複数性と対立するものではなく、およそ「反政治的」なものではない。というのも、本節で確認してきたように、「ひとりである」ことは、そのこと自体が複数性と相容れないのでは断じてないからであり、あるいはまた、孤立したあり方は、じつは「間接的なしかたで」むしろ「人びとの相互共存とかく結びついている」のであって、複数性のあり方のひとつとみなされるべきものだからである。しかも、それだけではない。アーレントの視点にあっては、そもそも唯一の個性そのものが——ひとまずはいわば論理的な意味でも——他者との関係においてはじめて可能になるものとみなされている。すなわち、各々の個人の「とり違えようのない唯一性」は「自分と区別される者かもしや誰もいない」場合には「消滅」してしまうのであり (DT. 460f.; II-15)、したがって個人はあくまでも「その個性のためにたえず他者たちを必要としている」とみなされるべきなのである (EJU. 359; II-187)。見捨てられたあり方というそれこそが反政治的な——そして自発性が解体される

——ありようは、むしろそのような個人が「他者たちから見放され、切斷される」ときにはじめて生起するものにほかならない (ibid.)。

自発性の自由の成り立ちは、こうして複数性と対立するどころか、むしろ複数性を前提とし、他者たちの間でこそ可能となるものと考えられていることになる。この点を確認することは、とはいえ、ここで明らかにされるべきことの、なおも半面にすぎない。唯一の個性に根ざすものであるはずの自発性は、そもそもどのような意味で複数性と関連し、そしてその内実はいかなるものでありうるのだろうか。複数性を前提とする自発性の成り立ちそのものをめぐり、節をあらためて考えることにしたい。

六 呼応としての自発性

(1) 論点の整理

アーレントの視点において自発性の自由は、やはり複数性を前提とし、他者たちとの関わりの中にその成り立ちが認められるべきものであった。そのことの仔細をあらためて考えてみるうえで、ただしより立ち入って問われるべき論点が複数あるように思われる。ここでは三点に整理しておく。

まず第一に、そのような自発性の成り立ちにおいて個性と複数性とはいかなる関係にあるのか、そのことが示されるべきであろう。アーレントの思考において、自発性は出生性に根ざし、それゆえ唯一の個性を根拠とするものと把握される一方で、そ

の自発性の成り立ちには複数性が前提として想定されてもいる。だとすれば、自発性にとって複数性がその前提をなすのはいかなる意味でのことであり、そしてそのことは唯一的な個性が自発性の根拠であることとどのような関係にあるといえるのであろうか。

そしてこの一つ目の論点とも関連して、第二に、自発性にとって複数性が前提となるということ自体は、そもそもどのようなことがそれを意味するのだろうか。いうまでもなく、そのことが問われなければならないはずである。自発性の自由は、はたしてなぜ、またどのようなかたちで、他者との関わりを通じて、あるいは他者たちの間で可能になるのだろうか、そのことの次第が明らかにされるべきであろう。

さらには第三に、そうした自発性が帯びることになるはずのあり方をめぐり、あらためて問いが生じようにも思われる。というのも、アーレントの思考において自発性は、他者との何らかの関わりを前提とするものとなる以上、何ほどか受動的で、いわば他律的な要素をはらむことになると思われるからである。すでに言及したとおり、自発性はしばしば「自己活動性」という意味で用いられ、それゆえまた——たとえばカントにあって「受動性」(Receptivität)と対置されているように——ある種の能動的なあり方と重ねて理解されてきたのだとすれば、複数性を前提とすることで想定されるそのようなあり方は、自発性とみなしうるならば限度を超えているのではないだろうか。

ところで、相互に関連しあうこれらの論点について考えてゆく

うえて、あらためて想起しておくべきことがある。それは、アーレントが着眼する自発性の自由のあり方についてである。(第三節ですこし詳しく確認しておいたとおり) アーレントはそもそも、「主権」としての自由の捉え方を強く批判し、「自己」に依拠するということがらに力点をおくのととは別のしかたで自発性の自由を特徴づけていた。すなわち——たとえばローザ・ルクセンブルクの視点とも重なるかたちで——、予測不可能で見えられない新たなことを始めることができるということ、そのことにこそ自発性の自由の核心を見いだしたのである。アーレントの思考における自発性と複数性との関わりについて検討するうえで、**「予測されがたく新しい何かを始める」自由 (LM, 232; II40)** というような自発性の自由の捉え方がおそらく決定的な意味をもつことになる。そのことを念頭におきながら、以下では、いまましがた整理した三つの論点をめぐって考えてゆくことにしたい。まずは当面の手がかりとして、それらの論点いずれにもかかわる**『人間の条件』独語版の**一節に目を向けることから始めよう。

(2) 「受忍」としての自発性

人間はもとより複数性において生を営む以上、行為をなし、何ごとかを始めるとき、いわば虚空に向かってそうするのではない。あくまでも、あらかじめ存在している共同世界のうちに、あるいはすでに人びとの間で織りなされている複雑な「関係の網の目」(the web of relationships: das Bezugsgeflecht)のうちへと、何か新たなことをもたらし、行為をもつて参入するのである (cf. VA.

226: 231f. EIU. 23: 1-33)。そうした「関係の網の目」の際限のなさゆえに「人間にかかわる事象」が有することになるあり方を論じた文脈のなかで、アーレントは次のように述べている。

行為する者はいつも、同じように行為する他の人びとの間を動いている。それゆえに、行為する者は、ただ行為者でしかないことはけつしてなく、いつもまた同時に、受忍する者でもある。行為と受忍は一体をなしており、受忍は行為の裏面である。ある行為によって動き始めた物語はいつも、その物語によって触発される人びとの行いと受難の物語なのである。〔……〕行為はいつも、行為する能力を具えた存在者に向けられるから、行為はたんに反作用を引き起こすだけではけつしてなく、自主的な行為を呼び起こすのであり、その呼び起こされた行為がまたもや、他の行為する者を触発するのである。特定の仲間内に限界づけられうるような行動と反応と行動は存在しない〔……〕。(VA. 236f: 242f)

行為し、何かを始める者はいつとも、「同じように行為する他の人びと」の間にある⁽¹⁾。何らかの行為はそれゆえに、他者を「触発する」(affizieren)ものとなるだけでなく、それ自体がまた他者に「触発される」ことでこそ生じるものである。行為する者は、ただ「行為者」(ein Täter)であるのではなく、あるいはたんに単独で自ら何かを始めるものではなく、いつも同時に「受忍する者」(einer, der erduldet)つまりその行為を始めるように

他者からつき動かされ、仕向けられる者なのである。「行為と受忍」(Handeln und Dulden)、「行いと受難」(die Taten und Leiden)、あるいは「行動と反応-行動」(Agieren und Re-agieren)は、じつは「一体をなして」いるのであって、いにかえるなら何かを始めるということは、いつもまた同時に、他者からいわば受動的に被ることがらであり、他者に対するある種の呼応なのである。ただし、そのように行為がまた受忍であり、他者に対する呼応であるということは、その行為がたんなる「反作用」(Reaktion)、もっぱら単純な反応に尽きることではない。他者の行為は、それが「行為する能力を具えた存在者に向けられる」かぎり、むしろ「自主的な行為を呼び起こす」(eigenständiges Handeln hervorrufen)。つまりは、自発的なものとしての行為を生起させるのである。何らかの行為をなし、何ごとかを始めるということは、いつも呼応というかたちで、しかもあくまで自発的なものとして、他者によって呼び起こされるのである。

アーレントのこうした視点、とりわけ、「自主的」ないし自発的な行為が他者から「呼び起こされる」というその立論は、ただしいうまでもなく、そのまま首肯されうるものとはいえない。ここで問われるべきはまさに、先ほど分節化した三つの論点である。ひとまず第三の論点から考えてゆくことにしよう。

アーレントによれば、行為はつねにまた受忍であり、しかもたんなる反応に尽きるのではなく、むしろ自発的なものとして生起する。とはいえ、もしも行為がまさに他者によって「呼び起こされる」のだとすれば、それは他者に「触発」される受動的なもの

にはかならず、それゆえ「自主的」で自発的なものとはおよそ相容れないはずであって、(アーレントが力点をおく自発性のあり方を認めたとしても)やはり自発性をそこに見いだすことはできないように思われる。自発性は往々にして、自己活動性という意味を与えられ、能動的なあり方を核にするものとして理解されてきたはずだからである。

自発性をめぐるアーレントの視点からすれば、しかし他者によって触発され、呼び起こされるあり方は、じつは自発性と相容れないものではけつしてない。むしろ、たんなる自己活動性や能動的なあり方には汲み尽くされえないこと、あるいは「自己」にもとづくあり方をどこかしら超え、出ることが、自発性のいわば積極的なあり方として見いだされることになる。というのも自発性の自由とは、あくまで予測不可能で予見されえない何か、つまりは自ら自身の意図や想定にも収まらない何か、そのような新たなものごとを始めうるということだといえるからである。⁽¹²⁾ アーレントはたとえば、「自由とは何か」というよく知られた論考のなかでこう述べている。

行為は自由であるためには、一方では動機から、他方では予測可能な結果としての意図される目標から自由であるの
なければならない。行為の一つ一つの局面において動機や目的が重要な要因でないというわけではない。それらは行為の一つ一つの局面を規定する要因ではあるが、そうした要因を超越することができるかぎりです。その行為は自由なのである。

(BPF, 150: 204)

行為が自由でありうるのは、それが「動機」(motive)によつてだけでなく、「意図される目標」(intended goal)によつても規定されえないかぎりのことであり、それゆえむしろ、行為がそれらを「超越することが出来る」(be able to transcend) かぎりでのことである。なぜなら、行為者自身の意図する目標や目的もまた、行為に先立ちあらかじめ知られているものである以上、それらによつて行為が規定されてしまうのだとすれば、行為はけつきよく、あらかじめ想定され、予見されるものであることになるからである。⁽¹³⁾ すぐれた意味での自由、自発性の自由が可能であるためには、既存の世界のありようだけでなく、(その一部ともいえる)行為者自身の想定や意図をも何ほどか超え出たかたちで行為が生起するということ、いわば思わず、行為を始めてしまうというモメントが不可欠なのである。⁽¹⁴⁾

行為の自発性の核心は、自己活動性や能動性といった点にあるのではない。むしろ自己の意図をも超えた何か、自らも予見しえない新しい何ごとか、そうしたものを思いがけず始めてしまうことができるという点にこそ見てとられる。まさにそのかぎり、他者から呼び起こされる受動的なあり方と重ねて自発性を把握することは、何か飛躍した観方ではなく、十分に理解する余地のある視点とみなしうるようになる。⁽¹⁵⁾ ただし、先の込み入った一節にそくしてここで問われるべき論点には、さらに二つのものがあった。今度は(直接には)その第二の論点について考えてみた

い。すなわち、アーレントの考える自発的な行為のいつその含意についてはさしあたり確認できたとして、しかしその自発的な行為がある種の呼応として、他者から呼び起こされるということとは、そもそもどのようなことであり、いかにして可能なのだろうか。いいかえれば、自発性の自由は、はたしてなぜ、またどのようなかたちで、他者との関わりを通じて可能になるのだろうか。若干の例も交えながら、そのことを次に考えることにしたい。

(3) 自発的な行為と他者による「呼び起こし」

すぐれて予見不可能なものと、新しい何かを始めるということとは、じつは他者から触発されることがらであり、他者に対する呼応として生起する。つまり、自発的な行為は他者によって呼び起こされる。そのようにみなす視点の一方で、しかしそのアーレント自身、おそらくは当然のことながら、他者あるいは外部の何かに触発されて何らかの「反応」が引き起こされるということを、そのままただちに、自発的な行為が呼び起こされるということがらとして理解しているわけではない。むしろアーレントは、たとえば(第三節でも見ておいたとおり)、全体主義の支配体制によって企図される自発性の根絶という事態を、人びとがまさに「反応の束」(bundles of reactions) (EJU. 304; II-118) に還元されるということがらとして把握している。「自発性を破壊する」試みとは、「同じ条件を与えられればいつも同じしかたで反応するような反応の束」へと「人びとを変える」企てにはかならない(ibid.)。こうした視点のもとでは、反応ということとは、自発性と

はむしろ端的に相反するあり方、何らかの外的要因によって引き起こされる予見可能な行動といったものを意味しているにすぎない。

自発的な行為が呼び起こされるということは、したがって、たしかにそれもまた他者に触発されるある種の反応のあり方であるのだとしても、いわば反応ということがら一般とは区別され、とりわけ非自発的な意味での反応とは決定的に異なる成り立ちをしていなければならないことになる。⁽¹⁶⁾だとすれば、自発的な行為が呼び起こされるということをそれとして際立たせ、また可能にするのは、はたしてどのような事態であるのだろうか。おそらくその核心をなしているのは——先ほど引いた『人間の条件』独語版の——一節にそくしていえば——、行為する者が「同じように行為する他の人びと」の間にあるということであり、つまりは、そのような他者たちに対して何らかのかたちで応接し、関わりをもつということである。

自発的に行為する者がそもそも「行為する能力を備えている」(zum Handeln begabt) といえるのは、(第四節で考察したように) その出生性、したがってまたその唯一性のためであった。いいかえるなら、「新参者」として、あるいは「よそ者」として、先立つ世界との間に何らかの差異をはらみ、既存の世界に対する何ほどの隔たりを有しているがゆえのことであった。そうした新参者、よそ者としての他者、つまり予見されない何かをなすうるものとしての他者に、どこかで関わり触発されるということ、そのことこそが、自発的な行為、新しい何かを始めるということ

を呼び起こし、現実的に生起させうることになる。なぜなら、自発的な行為には、自ら自身の既存のありようをも超え出て、思わず何ごとかを始めてしまうというモメントが不可欠だったからであり、そしてそれを可能にするのは、既存の世界のあり方に依拠した自ら自身の想定にはけつして収まりえず、それをいわば揺さぶるような他者のありようへと応接することだといえるからである。たとえばアーレントは、道徳哲学にかかわるある講義で「ひとり」であることの三つの形態をとりあげ、とくに「孤独」における思考の営みについて語るなかで、次のように述べている。

もしも誰かが私に呼びかけてきたなら、私はその人に話しかけなければなりません。そして、私自身にはなく、その誰かに話しかけると、私は変わります。私は「ひとりのうちなる二者」であることをやめて「ひとりになり、とうぜん自己意識をもち、つまりは意識をもっていますが、しかしもはや、私自身を完全に、また明確に所有している状態ではなくなるのです。(RI. 98: 119. 「」は筆者)

おそらくはもう少し補われるべきこの一節にかんして、ここでは当面の論点に強くかわる点にのみ着目しておこう。——誰かの呼びかけに呼応して、その誰かに話しかけると、私は「もはや、私自身を完全に、また明確に所有している状態ではなくなる」(no longer fully and articulately in possession of myself)。つまり、あらかじめ思い描き、意図していたままに話したりふる

まったりすることができなくなり、たとえば、口にするつもりがなかったことをふと言葉にしてしまったり、思ってもみなかった態度を不意にとつてしまったり、あるいは予期していなかった新しいことを思いついたりすることになる。なぜだろうか。いうまでもなく、私が話しかけ応接するのが、他者であるからである。つまり、自分のあらかじめの想定にはけつして回収しえないものであるからである。もちろん、他者に話しかけると、すでに意図していたことをもともと想定していたそのままに話すといったことも、おそらくはありうるであろう。しかしその場合は、実際には他者に対して話しかけているのではないのであって、いわば他者不在のモノローグをなしているにすぎないであろう。(そしてそこで話されることは、あらかじめ想定されていたこと、既存のことからの反復であるほかはない。) それとは対照的に、あくまで他者に、つまりすぐれて異他的なものであるはずの他者に、いわば開かれたかたちで応接し呼応するかぎり、自らの先立つ意図や想定のままにふるまうことはできず、しかしそのことがむしろ、自発的な行為を呼び起こし、予見されえない新たなことを思わず始めてしまうということが可能にする。⁽¹⁸⁾

自発的な行為のこのような成り立ちも、もちろん言葉による直接の対人的な応答にのみ限定されるものではないであろう。アーレントの視点においては(前節で確認したとおり)、「孤立」してなされることも、じつは間接的なかたちで、つまり事物の世界を介して、他者たちとの関わりの中にあることになる。そうである以上、たとえば、さしあたっては孤立したあり方で営まれる芸

術作品の制作にあつても、そこで発露される自発性は、あくまで何らかの意味での他者への呼応として——ある場合には、いつか受け手となるかもしれない他者、それゆえ現前してはいない他者に向けての、いわば沈黙した応答というかたちで——生起するものといえる。¹⁹⁾もしもかりに、いつさいの他者との接触や関わりが絶たれ、それゆえ他者に対する呼応がおよそなされえないといった事態が生じるとすれば、そのときとは、まさに見捨てられたあり方へといたることになり、もはや新たな何かを始めることをなしえずに、いわば同語反復的に既存のものごとを反復するに等しい思考と生存のあり方へと陥ることになる。

自発的な行為には、自分自身の意図をも超えて新しい何かを始めてしまうというあり方がはらまれていなければならない。それゆえに、自らの先立つ想定にはけつして収まりえないものである他者と関わり、それに応接するということが、自発的な行為を生起させ、呼び起こすことになる。こうした意味で、自発性は他者への呼応としてこそ可能になり、だからそれには複数性が前提されるのである。こうして、少し前に整理した三つの論点のうち、第二と第三のものについては一定の説明が与えられたことになろう。そして、第一の論点——つまり、自発性にとって複数性がその前提をなすことと出生性が自発性の根拠であることとの関係をめぐる論点——にかんしても、じつはこれまでの論述のうちですでに若干の手がかりが与えられていたといえる。その仔細については、しかし節をあらためたうえで、自発性と複数性、自発性の自由と政治的自由との関係をめぐる本稿全体の問題設定とも関連

づけながら、あらためて確認したい。

七 結びにかえて——自発性・複数性・政治的自由

政治的自由と自発性の自由——つまり、人びとの間でこそ可能になる相互的・共同的な行為のあり方としての自由と、新しい何かを始めうることとしての自由——、アーレントがともにすぐれた自由のあり方とみなすこの二つの自由の関係をめぐり、とくに自発性と複数性との関連について考えてみることに、それが本稿の課題であった。というのも、政治的自由は端的に複数性においてしか成り立ちえないのに対し、自発性の自由は出生性、あるいは唯一的な個性性にこそ根ざした「前政治的なもの」として把握される以上、二つの自由はむしろ相容れないものであるようにも思われたからである。

しかしながら、これまで考察を重ねてきたように、アーレントの思考について少し慎重に検討してみるなら、じつは自発性の自由もまた、複数性をいわば不可欠の前提とするものとして把握されているとみなすことができる。アーレントが着目するのは、あくまで予測不可能で予見されえない何かを始めうるという自発性のあり方であり、それが可能であるためには、既存の世界からの差異とともに、自らの意図や想定をも超え出て何かを始めてしまうというモメントが不可欠である。まさにそのために、自発性は複数性のうちで、他者との関わりによって成り立つものとみなしうることになる。すなわち、予見不可能なことをなしうる他者へ

の応接によってこそ、自発的な行為は呼び起こされるのであり、それゆえに、自発性の自由は他者への呼応として生起するのである。

こうして自発性の自由にとっては、複数性がむしろ不可欠の前提となっていることになる。そうだとすればしかし、そのことと、出生性が自発性の根拠であることは、どのような関係にあると考えるべきであろうか。積み残されていたこの問いに対して、さしあたりひとりで説明を与えようとすれば、次のようになろう。すなわち、自発性そのものの根拠となるのは出生性、唯一的な個性であり、しかしその自発性を「呼び起こす」のは他者への関わり、あるいは複数性である。一方で、かりに出生性ということがまったくありえないとするなら、つまり各人が新参者、よそ者であるということがありえず、既存の世界との間の差異が存在しえないのだとすれば、そもそも自発性の自由は不可能であろう。その意味で、出生性、唯一的な個性は、自発性の根拠である。他方でしかし、そのような出生性に依拠した自発性の自由が、いわばたんに可能性にあるのではなく、じつさに発揮され、現実化されるうえで、他者と関わり、他者に応接することが不可欠である。各人の意図を超えて、何らかの行為をじつさに始めてしまうということがなければならぬからである。それゆえ、自発性はいわば他者によって呼び起こされるのである。

たとえば、第五節の冒頭で引いた『人間の条件』独語版の一節を思い起してみよう。そこではたしかに、「イニシアティヴ」、何かを始めるといふことは、「そのもの」としては「他者たちの現

前によって条件づけられてはいない」ということ、そして「その動因」は「この世界に私たちが誕生したことによって生じた始まりのうちに存している」とみなすべきことが述べられていた。しかし、そこではまた、そうしたイニシアティヴにとって「他者たちの現前」が、「個々の場合にはいずれも (in jedem Einzelfall) 刺激として働くかもしれない」と述べられてもいる。つまり、何かを始めると、自発的な行為にとつて、他者たちの現前は、じつさいの各々の場面では「刺激」(Stimulus)として、いわばそれを呼び起こすものとして働くことが確認されているのである。しかも、この一節ではひとまず他者たちの「現前」が問題となっているとはいえず、すでに述べたように、自発性が他者への呼応として生起するという場合、その他者との関わりは、現前している他者との直接的な関わりに限らず、不在の他者との間接的な関わりでもありうるのであった。自発性の自由は、たしかに唯一的な個人に根ざしており、そこから生じるものである。ただしそのことは、他者との何らかの関わりの中で、他者に呼び起こされることによつて、なのである。

まさにこのかぎり、自発性の自由と政治的自由とは、およそ交わるものでもないものでも、まったく相容れないものでもないことになる。むしろいづれも、複数性を前提とし、他者との関わりの中に生きるといふ人間のあり方のものでこそ可能になるのであって、いわば重なりあう関係にあるとみなすことができる。そうした両者の関係について、もしもさらに立ち入ったことをいうとすれば、(それぞれの自由の内実からしてもおそらく想定される

ように、) 自発性の自由、予見されえない新しい何かを始める自由のほうがいいわば基底的なものであり、それがあってこそ政治的自由も可能となるという関係にあるはずである。相互的・共同的な行為も、やはり「始める」ことができなければならぬからである。アーレント自身の(すでに第二節で引いた)言葉にそっくりいえば、「自由そのものの能力、始めるといって純然たる能力」(the faculty of freedom itself, the sheer capacity to begin)は、「あらゆる人間的な活動(all human activities)を生気づけ引き起こす」ものなのである(BPF, 167: 229; cf. VA, 18: 14)。

二つの自由のこのような重なりあう関係を考えるうえで、しかしてできるだけアーレントの視点により添おうとするなら、それらの自由の間の差異はけっして捨象されてはならないであろう。唯一的な個性に根ざす自発性の自由の成り立ち、政治的自由にはやはり回収されることができないのである。というのも、政治的自由が可能であるためには、他者たちの現前とその他者たちとの相互的な関わりとが不可欠であるといえるが(cf. WP, 47: 37, BPF, 214: 294)、自発性の自由を生起させる他者への応接ということが、それは多分に異なるあり方をしていいると考えられるからである。すなわち、そのような応接にあって他者は、(すでに確認したとおり)必ずしも現前している必要はないのである、そしてまた、他者へのそうした呼応は——たとえばレヴィナスがくり返し強調したように——、さしあたっては相互的なものではなく、いわば非対称的なものであるからである。アーレントの視点にあって自発性の自由は、そのものとしてはやはり前政治

的なものである。

とはいえ、自発性のそうした前政治的なあり方が、たとえば何か「個」に閉ざされた、あるいは「自己」にとらわれたありようといったものを意味しているのではないことは、もはやくり返すまでもないであろう。むしろアーレントの思考にあって、自発性の自由は、いわば差異としての唯一的な個性に根ざすものであると同時に、あくまで複数性のうちで、他者へと応接することによってこそ生起するものとして——つまりは、あらかじめ他者に開かれたものとして——把握されている。⁽²¹⁾まさにその意味で自発性の自由は、政治的自由と重なりつつ、ただしそれとは少し別の私たち、他者との関係のうちに把握される自由のあり方を提示するものといえるのである。

註

- (1) アーレントの著作からの引用はすべて、文献一覧に提示した略号によりテキストを示したうえで(略号はHauer, et al. (Hrsg.), *Arendt Handbuch*, S.394f.に倣った)、原書の頁数と、コロンの後に邦訳書の頁数を挙げる(邦訳書が複数巻に分かれる場合は、当該の巻数をローマ数字で示し、ハイフンの後に頁数をあげる)。なお、引用部にあっては、訳語を統一するという意味からも、筆者自身が訳出した箇所が少なからずある。
- (2) 「イニシアティヴ」はたとえば、「始めること」、「アルケイン」(das Anfangen, das »archein«) (WP, 50f.: 40)「あるいは「何らかの始まりを置き入れること」(ein initium setzen) (VA, 18: 14) 等等等置されている。(なお、「アルケイン」と

は元来「始めること」等を意味するギリシア語である。「行為」をめぐる文脈で、アーレントはこの「アルケイン」と、「完遂すること」・「成就すること」等も意味するギリシア語「プラツテイン」とを対比させた議論をしばしば行なっている。この点にかんしては註(3)も参照。

(3) 自発性と複数性との関係をめぐるアーレントの思考について検討するうえで、ひとまず着目されるべきいくつかの理路が存在すると思われる。そのうち、比較的目につきやすいにもかかわらず本稿ではたち入らない一つの理路について、少しだけ付言しておく。それは、いわば自発的な活動の「完成」・「成就」には複数性が不可欠となるという理路である。すなわちアーレントによれば、何かを「始める」ことそのものは個人ひとりでも可能であるとしても、始められたことを「さらに進め、完成させる」(weiter betreiben und vollenden)・あるいはその行為を「遂行し、成就する」(durchführen und vollbringen)ためには、何かを始めた個人に助力する「多数の人びと」・「他人たち」が存在しなければならぬ(VA. 235: 241, WP. 50: 40, cf. LK. 59: 90)。いくつかのテキストでくり返されるこの理路は、たとえば、始めることと行為とを重ねあわせ、自発性と複数性を整合的な関係のうちに把握しようとするうえで依拠されることもあるが(cf. Marchart, 'Natalität/Anfangen', S. 299)・しかしおそらく明らかであるように、本稿の問題設定には対応していない。なぜなら、この理路において焦点化されているのは、ひとたび始められたことがあくまで完遂され、達成されるためには複数性が明示的に不可欠となるという点であって、そもそも何かを始めること自体、自発性そのものの成り立ちと複数性との連関は、直接には問題となっていないためである。

(4) アーレントがそれぞれ明確に異なる意味を与えるこれらの語(solitude: Einsamkeit, isolation: Isoliertheit, loneliness: Verlassenheit)については、現在のところ訳書¹⁾とにさまざまな訳語があてられており、はつきりと定まった訳語はないように思われる。それでも、'solitude: Einsamkeit'は「孤独」と訳されることが多いといえるが、とりわけ'isolation: Isoliertheit'にはかなり多様な訳語があてられており(「孤立」・「孤立状態」・「孤絶」・「隔絶」・「独居」・「独立」など)・また'loneliness: Verlassenheit'も訳語が定まっているとはいえない(「見捨てられた状態」・「見捨てられていること」・「孤立」・「孤独」・「ひとりぼっち」など)・なお、本稿では——'isolation: Isoliertheit'は動詞としての用法も多いこと、また(本文でこのあと確認するように) 'loneliness: Verlassenheit'は複数性から絶対的に切斷されたあり方、いわば疎外された荒涼たる「ひとり」のあり方を意味することから——、(一定の訳書や研究文献の用法とは異なり) 'loneliness: Verlassenheit'のほうにいったん「孤絶」という訳語もあてておくが、やや混乱を招く可能性も否定できないように思われるため、この語については基本的に('Verlassenheit'の原義をそのまま活かす訳語として)「見捨てられたあり方」という語を用いることにする。

(5) さらにいえば、アーレントは、自己との対話としての孤独な思考の営みについて、むしろ「他者たちと共にあり生きる」との不可欠の要素」をなすものとみなしている(Pp. 36: 99)。

(6) 「制作は、世界において、また世界に対して(in und für die Welt)遂行される」(VA. 234: 240)・なお、芸術にかんするアーレントの思考にあつては、とりわけ制作物としての芸術作品が、(そしてまた演劇などの「パフォーマンス芸術」が)「現

われ」のための「公的な空間」を直接必要とする点で、より明確に「政治との親和性」をもつとみなされている (cf. BPF. 214f.: 294f. *ibid.* 152: 208, VA. 233f.: 239)。

(7) アーレントは「テロル」と「暴力」一般とを区別する。たとえば『共和国の危機』(訳書タイトル『暴力について』)から短く引いておく。「テロルは暴力と同じものではない。テロルはむしろ、暴力があらゆる権力を破壊してしまつた後に、退位するどころか反対に全面的な統制を続けているときに生じる統治の形態なのである」(CR. 154: 144)。テロルと暴力とのこうした関係にかんしては以下も参照。バーンスタイン『暴力』、一五一―一五三頁。

(8) ただし、アーレントのテクストにあつて、テロルによる複数性の破壊ということがらと自発性の解体という事態との関係は、必ずしも明示的に説かれているとはいえない。また、両者の関係の實質も、単純な整理には収まりにくいものであるように思われる。しかしたとえば、「全体主義的支配」のなされる社会にあつては、いっさいの「人間の間の関係」が破壊されて、「見捨てられた状態」におかれた人びとが全体主義の運動に動員されること (EU. 727: 296f.)、そして「自由な自発性から生じるいっさいの行為」が奪われることになること (EU. 710: 276) 等を主張するアーレントの視点をふまえるなら、両者は(端的に同じことがらではないにせよ)、いわば重なりあう関係にあるとみなすことができるであろう。

(9) Cf. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A50f./B74f. / 訳書、

第四卷、一一九―一三〇頁、参照

(10) 第三節および本稿「上」の註(20)を参照。

(11) 本稿「上」の註(10)でも触れたとおり、アーレントの

「行為」の概念には(「自由」のそれとも重なる)二義性がはらまれていると考えられるが、ここで引いた一節における「行為」は、ひとまず文脈的には、活動の三分における行為、すなわち、「制作」等とは区別される(とりわけ「言論」という形態を通じた)相互行為としての活動をおもに指しているように見ることもできるかもしれない。しかしながら、まずほかならぬアーレントの視点にそくしても、「行為」と始まりは本質的に同一である (BPF. 168: 230)、あるいは「何らかの新しい始まりをみずからつくりだす」ことがすなわち「行為すること」である (VA. 18: 13f.)とみなされているというだけでなく、アーレントがそのうちにも自発性、つまり新たなことを始める能力を見いだす——とくに芸術作品の創作等における——「制作」の営みについても、前節(第五節)で確認したように、間接的なしかたで「人びとの相互共存」と結びつき、複数性を前提としていると考えることができた。その意味でここに引いた一節における「行為」を、広く「始めること」と重ねて論じることが妥当性をもつということができよう。

(12) アーレントはくり返し、行為を予測したり予見したりすることの不可能性について論じているが、そうした不可能性にはいわば二つの意味がある。すなわち、(すでに始められた)行為の結果の予測不可能性と、始めることそのもの(これから始められる行為)の予測不可能性である。アーレントが随所ではしばしば論究しているのは前者についてであるが、それは自発性の自由の成り立ちに直接かわるものとはいえない。一方、自発性そのものに深く関連しているのは後者の予測不可能性であり、本稿がここで着目しているのは、その後者の予測不可能性である。

- (13) こうした点に関連するものとして、アーレントの比較的早い時期の論考(「実存哲学とは何か」)から、ごく印象的な一節を引いておく。ヤスパースの哲学に論及する文脈で、アーレントはこう述べている。「私が現実を思考のうちに解消しえないことは、私の潜在的な自由の勝利となる。逆説的に表現すれば、私は、私自身を創っていないがゆえにのみ、自由なのである(Only because I have not made myself am I free)。もし私が私自身を創ったのだとすれば、私は私自身を予見する (foresee myself) ことができたことになり、それゆえ不自由になっていたはずである」(EJU. 184: I-249)。
- (14) このような行為の自発性にかんして、やや異なる文脈の言葉をもちいて補っておくとすれば、自発的なことがらは、「つくりだされる」(be made)というより、いわば「突発する」(break out) のびある (cf. MDT. 52: 86)。
- (15) 自発性の自由における受動的なモメントをめぐっては、たとえば以下も参照。森一郎『死と誕生』、一一九頁、一四〇―一四一頁等。ただし同書では、自発性の「前政治性」にかかわる問題設定が本稿と共有されているとはいえない。
- (16) ただし、自発的な行為もまた呼応として、それゆえある種の反応として生起するのであって、「反応」(ないし「反作用」)(reaktion: Reaktion)と自発的な行為とが端的に対立するというのではない。自発性に対立するのは、「反応」そのことではなく、いわば「予測された反応」(anticipated reaction)であるといえる (cf. LM. 2-14: II-16)。アーレントの思考における「反応」の概念の立ち入った分析はここでは行うことができないが、たとえば、「赦し、同情、和解」のあり方として述べられている「本来の自発的な反作用」(die eigentliche spontane Reaktion)とよった概念 (DT. 312: I-400) も含めて、さらに綿密な考察が必要であると思われる。
- (17) たとえば、とりわけ「孤独」(またそのひとつの典型的なあり方となる「思考」の営み)と自発性との関連について、いくつかの観点から補足することが必要と思われる。ただしそのことは、おそらく入りくんだ議論を要する一方で、本稿の主題からは少し外れた考察となるため、ここでは立ち入らない。
- (18) 自発性と他者への呼応との関連について、他者との「日常の会話」を例とした考察を行っているものとして、以下も参照の11)。Arnold, *Across the Great Divide*, pp. 98-99. ただし同書では、アーレントの自由概念のいわば一義性が主張されており、したがって政治的自由と自発性の自由、また複数性と自発性との関係をめぐる本稿の関心と問題設定はそもそも素通りされている。
- (19) 本稿「上」の註(15)でも触れたとおり、アーレントの芸術論の仔細、またその妥当性について論じることは、ここでは課題としない。
- (20) Cf. Levinas, *Alterité et transcendance*, p. 111 / 訳書、一〇六―一〇七頁、参照。
- (21) 自発性の自由のこうした二面的な成り立ちは、たとえば(やや別の文脈ではあるが)、「人生の物語」(Lebensgeschichte)をめぐって述べられた次のような一節から看取することもできよう。「誰かが物語を始めたのであり、行為しつつ物語を演じかつ被った(dargestellt und erlitten haben)のだが、その物語を案出した(ersonnen haben)者は誰もいなく」(VA. 227: 233)。なお、このような自発的な行為のあり方、そしてまたそれと政治的自由との関連が、アーレントの「責任」概念(ま

た「個人的責任」と「政治的責任」との関係)について考察するうえで少なからぬ意味をもちうる点については、本稿「上」の註(14)に述べたとおりである。ただし、そのように責任(わけても「個人の責任」と)の関わりを考える場合、自発的な行為における行為者自身の意図を超えるモメントのあり方、あるいは行為の「私」への帰属にかんするある種の不明瞭さが、おそらく問題として浮上することになるようにも思われる。この点に関連して、そうした帰属がいわば公共的に、そして事後的なかたちで明確になることを主張する次のようなアーレントの視点は注目に値すると思われる。「物語の主人公(Held)が誰であるかは、物語られうることを媒質としてのみ、それゆえ事が起こったあとで(ex post facto)こそ、把握可能な意味豊かなあり方で現われる」(VA, 231, 237)。

文献一覧(「上」・「下」全体)

I. アーレント(Arendt, Hannah)の文献

- BPF: *Between Past and Future. Eight Exercises in Political Thought* (1961/68), Penguin Classics, 2006 / 『過去と未来の問』(引田隆也・齋藤純一訳)みすず書房、一九九四年
- CR: *Crises of the Republic* (1972), Harcourt Brace & Company, 1972 / 『暴力にこころい——共和国の危機』(山田正行訳)みすず書房、二〇〇〇年
- DT: *Denktagebuch 1950-1973*, Ursula Ludz und Ingeborg Nordmann (Hg.), Ungekürzte Taschenbuchausgabe, Piper, 2020 / 『思索日記I 1950-1953』・『思索日記II 1953-1973』

(青木隆嘉訳) 法政大学出版社、二〇〇六年

E: *Eichmann in Jerusalem. A Report on the Banality of Evil* (1963/68), Penguin Classics, 2006 / 『イェルサレムのアイヒマン』(大久保和郎訳)みすず書房、新装版、一九九四年

EU: *Essays in Understanding 1930-1954*, Jerome Kohn (ed.), Harcourt Brace & Company, 1994 / 『アーレント政治思想集成』(齋藤純一ほか訳)みすず書房、全三巻(『アーレント政治思想集成1 組織的な罪と普遍的な責任』、『アーレント政治思想集成2 理解と政治』、二〇〇二年)

EU: *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft* (1955), Ungekürzte Taschenbuchausgabe, Piper, 1986 / 『全体主義の起原』(大久保和郎ほか訳)みすず書房、全三巻(『全体主義の起原1 反ユダヤ主義』、『全体主義の起原2 帝国主義』、『全体主義の起原3 全体主義』、新装版、一九八一年)

HC: *The Human Condition* (1958), 2nd edition, The University of Chicago Press, 1998 / 『人間の条件』(志水速雄訳)ちくま学芸文庫、一九九四年

LK: *Lectures on Kant's Political Philosophy*, Ronald Beiner (ed.), The University of Chicago Press, 1982 / 『カント政治哲学の講義』(浜田義文監訳)法政大学出版社、一九八七年

LM: *The Life of the Mind*, One-volume Edition, Harcourt Brace, 1978 / 『精神の生活』(佐藤和夫訳)岩波書店、上・下(『精神の生活上 第一部 思考』、『精神の生活上 第二部 意志』、一九九四年)

MDT: *Men in Dark Times* (1968), Harcourt Brace & Company, 1968 / 『暗き時代の人々』(阿部齊訳)ちくま学芸文庫、二〇〇五年

- OR: *On Revolution* (1963/65). Penguin Classics, 2006 / 『革命に
 つまじ』(志水速雄訳) ちくま学芸文庫、一九九五年
- OT: *The Origins of Totalitarianism* (1951/58). Penguin Classics,
 2017 / 『全体主義の起原』、全三巻
- PP: *The Promise of Politics*. Jerome Kohn (ed.), Schocken
 Books, 2005 / 『政治の約束』(高橋勇夫訳) ちくま学芸文庫、
 二〇一八年
- RJ: *Responsibility and Judgment*. Jerome Kohn (ed.), Schocken
 Books, 2003 / 『責任と判断』(中山元訳) 筑摩書房、二〇〇七
 年
- VA: *Vita activa oder Vom tätigen Leben* (1960). Ungedruckte
 Taschenbuchausgabe, Piper, 2002 / 『活動的生』(森一郎訳)
 みすず書房、二〇一五年
- WP: *Was ist Politik? Fragmente aus dem Nachlaß*. Ursula Ludz
 (Hg.), Piper, 2003 / 『政治とは何か』(佐藤和夫訳) 岩波書店、
 二〇〇四年
- II. それ以外の文献
- Aristoteles: *Ethica Nicomachea*. Oxford Classical Texts, 1894 /
 『ニコマコス倫理学』(朴一功訳) 京都大学学術出版会、二〇
 〇二年
- Arnold, Jeremy: *Across the Great Divide. Between Analytic and
 Continental Political Theory*. Stanford University Press, 2020
- Beiner, Ronald: *Action, Natality and Citizenship*. Hannah
 Arendt's Concept of Freedom. in Zbigniew Pelczynski / John
 Gray (eds.), *Conceptions of Liberty in Political Philosophy*.
 The Athlone Press, 1984 / 「トーンメント」(齋藤純一訳)、『自
 由論の系譜』行人社、一九八七年、所収
- Berlin, Isaiah: *Two Concepts of Liberty* (1958). in Berlin, (ed.
 by Henry Hardy), *Liberty*. Oxford University Press, 2002 /
 「二つの自由概念」(生松敬三訳)、『自由論』みすず書房、一九
 七一年、所収
- Bramhall, John: *Bramhall's discourse of liberty and necessity*. in
 Vere Chappell (ed.), *Hobbes and Bramhall on Liberty and
 Necessity*. Cambridge University Press, 1999.
- Brunckhorst, Hauke: *Equality and elitism in Arendt*. in Dana
 Villa (ed.), *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*.
 Cambridge University Press, 2000
- Burke, Edmund: *Thoughts on the Cause of the Present Dis-
 contents* (1770), in *The Works of The Right Honourable Ed-
 mund Burke in twelve volumes*. John C. Nimmo, 1887, vol. 1 /
 『現代の不満の原因を論ず』(中野好之訳)、『エドモンド・ハー
 ク著作集』みすず書房、第一巻、一九七三年、所収
- Butler, Judith: *Notes Toward a Performative Theory of As-
 sembly*. Harvard University Press, 2015 / 『アサンブリー——行
 為遂行性・複数性・政治』(佐藤嘉幸・清水和子訳) 青土社、
 二〇一八年
- Habermas, Jürgen: *Das Sprachspiel verantwortlicher Urhe-
 berschaft und das Problem der Willensfreiheit*. in Hans-Peter
 Krüger (Hrsg.), *Hirn als Subjekt? Philosophische Grenzfragen
 der Neurobiologie*. Akademie, 2007
- Heuer, Wolfgang / Heiter Bernd / Rosenmüller, Stefanie (Hrsg.):
Arendt Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. J. B. Metzler, 2011
- Hoffmann, Thomas S.: *Spontanität*. in Joachim Ritter und Karl-

Fried Gründer (Hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Schwabe, Bd. 9, 1995

Honneth, Axel: *Das Andere der Gerechtigkeit. Aufsätze zur praktischen Philosophie*, Suhrkamp, 2000 / 『正義の他者——実践哲学論集』(加藤泰史・日暮雅夫ほか訳) 法政大学出版局、二〇〇五年

Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft* (1781/87), Felix Meiner, 1971. / 『純粹理性批判』(有福孝岳訳)、『カント全集』岩波書店、第四一六卷、二〇〇一—〇六年、所収

—— *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* (1785), in *Kant's gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. IV, 1911 / 『道徳形而上学の基礎づけ』(宇都宮芳明訳) 以文社、一九八九年

—— *Metaphysik I, Kosmologie, Psychologie, Theologie nach Pölitz*, in *Kant's gesammelte Schriften*, Bd. XXVIII, 1. Hälfte, 1968 / 『形而上学I』、『カント全集』、第一九卷、二〇〇二年、所収

Kenny, Anthony: *Freedom, spontaneity and indifference*, in Ted Honderich (ed.), *Essays on Freedom of Action*, Routledge, 2015

Levinas, Emmanuel: *Altérité et transcendence*, Fata Morgana, 1995 / 『他性と超越』(合田正人・松丸和弘訳) 法政大学出版局、二〇〇一年

Luxemburg, Rosa: *Massenstreik, Partei und Gewerkschaften* (1906), in *Ausgewählte Reden und Schriften*, hrsg. von Marx-Engels-Lenin-Institut beim ZK der SED, Dietz, Bd. I, 1951 / 『大衆ストライキ・党および労働組合』(河野信子・谷川雁訳) /

『ローザ・ルクセンブルク選集』現代思潮社、第二巻、一九六九年、所収

—— *Die Krise der Sozialdemokratie* (Junius-Broschüre) (1915/16), in *Ausgewählte Reden und Schriften*, Bd. I / 『社会民主党の危機(ユニウス・ブroschüre)』(片岡啓治訳)、『ローザ・ルクセンブルク選集』、第三巻、一九六九年、所収

Marchart, Oliver: *Natalität/Anfangen*, in Heuer et al. (Hrsg.), *Arendt Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*.

Sartre, Jean-Paul: *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard, 1943 / 『存在と無——現象学的存在論の試み』(松浪信三郎訳) ちくま学芸文庫、第一—三巻、二〇〇七—八年

Sgarbi, Marco: *Kant on Spontaneity*, Bloomsbury, 2013

アウグスティヌス『神の国』(服部英次郎ほか訳) 岩波文庫、全五巻、一九八二—九一年

カノヴァン、マーガレット『ハンナ・アレントの政治思想』(寺島俊穂訳) 未來社、一九九五年

川崎修『ハンナ・アレントの政治理論——アレント論集I』岩波書店、二〇一〇年

木前利秋『「始まり」の構想力——唯一性と複数性のあいだ』、『現代思想』一九九七年七月号、所収

齋藤純一『自由』岩波書店、二〇〇五年

——『自由論——複数性のもことで「動く」自由』日本アレント研究会(編)『アレント読本』法政大学出版局、二〇二〇年、所収

斎藤慶典『私は自由なのかもしれない——〈責任という自由〉の

形而上学』慶應義塾大学出版会、二〇一八年

千葉真『アーレントと現代——自由の政治とその展望』岩波書店、一九九六年

バーンスタイン、リチャード・J. 『暴力——手すりなき思考』
（齋藤元紀監訳、梅田孝太ほか訳）法政大学出版社、二〇二〇年

橋爪大輝『活動／行為——それは語りなのか』、『アーレント読本』、所収

森一郎『死と誕生——ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会、二〇〇八年

森川輝一『〈始まり〉のアーレント——「出生」の思想の誕生』

岩波書店、二〇一〇年

ヤング・ブルーエル、エリザベス『ハンナ・アーレント——〈世界への愛〉の物語』（大島かおりほか訳）みすず書房、二〇二一年

*本稿は、「上」に引き続き、二〇二〇年度東京経済大学共同研究助成費（研究番号 D20-3）に基づく研究成果の一部である。